

6.5 〔金〕	第549回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演
	The 549th Subscription Concert Friday, 5th June, 19:00 / Suntory Hall

指揮／ユーリ・テミルカーノフ	Conductor YURI TEMIRKANOV	P.7
メゾ・ソプラノ／小山由美	Mezzo-Soprano YUMI KOYAMA	P.10
女声合唱／新国立劇場合唱団	Women's Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS	P.10
児童合唱／NHK東京児童合唱団	Children's Chorus NHK TOKYO CHILDREN CHORUS	P.10
コンサートマスター／日下紗矢子	Concertmaster SAYAKO KUSAKA	

マーラー 交響曲 第3番	ニ短調 [約100分]	P.12
MAHLER / Symphony No. 3 in D minor		
I. Kräftig. Entschieden		
II. Tempo di Menuetto. Sehr mäßig. Ja nicht eilen!		
III. Comodo. Scherzando. Ohne Hast.		
IV. Sehr langsam. Misterioso. Durchaus ppp.		
V. Lustig im Tempo und keck im Ausdruck		
VI. Langsam. Ruhevoll. Empfund.		

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。*No intermission

〔主催〕 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 〔助成〕 藝文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
 〔協力〕 **アフラック**（アメリカンファミリー生命保険会社）

6.11 〔木〕	第583回 サントリーホール名曲シリーズ サントリーホール／19時開演
	The 583rd Suntory Hall Popular Series Thursday, 11th June, 19:00 / Suntory Hall
13 〔土〕	第178回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 東京芸術劇場／14時開演
	The 178th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Saturday, 13th June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ユーリ・テミルカーノフ	Conductor YURI TEMIRKANOV	P.7
ピアノ／デニス・マツエフ	Piano DENIS MATSUEV	P.11
コンサートマスター／小森谷巧	Concertmaster TAKUMI KOMORIYA	

プロコフィエフ ピアノ協奏曲 第3番	ハ長調 作品26 [約27分]	P.16
PROKOFIEV / Piano Concerto No. 3 in C major, op. 26		
I. Andante – Allegro		
II. Andantino		
III. Allegro ma non troppo		

〔休憩 Intermission〕

ショスタコーヴィチ 交響曲 第10番	ホ短調 作品93 [約50分]	P.18
SHOSTAKOVICH / Symphony No. 10 in E minor, op. 93		
I. Moderato		
II. Allegro		
III. Allegretto		
IV. Andante – Allegro		

〔主催〕 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 〔助成〕 藝文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
 〔事業提携〕 東京芸術劇場（6/13）

6.16 [火]

第5回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説)
The 5th Yomikyo Ensemble Series
Tuesday, 16th June, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

指揮／川瀬賢太郎 Conductor KENTARO KAWASE

ヴァイオリン／アレクサンダー・シトコヴェツキー
Violin ALEXANDER SITKOVESKY

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社メディア局編集委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

《川瀬賢太郎のモーツァルト》

モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 [約4分]
MOZART / “Le nozze di Figaro” Overture

モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第3番 ト長調 K. 216 [約23分]
MOZART / Violin Concerto No. 3 in G major, K. 216
I. Allegro
II. Adagio
III. Rondeau. Allegro

[休憩 Intermission]

モーツァルト 交響曲 第41番 ハ長調 K. 551 〈ジュピター〉 [約31分]
MOZART / Symphony No. 41 in C major, K. 551 “Jupiter”
I. Allegro Vivace
II. Andante Cantabile
III. Menuetto. Allegretto
IV. Molto Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

6.19 [金]

第10回 読響カレッジ
文京シビックホール／20時開演(19時30分から解説)
The 10th Yomikyo College
Friday, 19th June, 20:00 (Pre-concert talks from 19:30) / Bunkyo Civic Hall

指揮／石川星太郎 Conductor SEITARO ISHIKAWA P.8

ナビゲーター／中井美穂 Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.20
DVORÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 “From the New World”
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco



ナビゲーター
中井美穂 Miho Nakai

アナウンサー。
ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。現在、「タカラヅカ・カフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)、舞台「スジナシBLITZシアター」にレギュラー出演。97年から「世界陸上」(TBS)のメインキャスターを務める。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。2013年から読売演劇大賞選考委員を務める。

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 文京シビックホール(公益財団法人文京アカデミー)

6.24 [水]	第17回 読響メトロポリタン・シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 The 17th Yomikyo Metropolitan Series Wednesday, 24th June, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
25 [木]	非破壊検査 Presents 読売日本交響楽団 第11回 大阪定期演奏会 ザ・シンフォニーホール／19時開演 The 11th Subscription Concert in Osaka, presented by Non-Destructive Inspection CO., Ltd Thursday, 25th June, 19:00 / The Symphony Hall

指揮／フランソワ＝グザヴィエ・ロト Conductor FRANÇOIS-XAVIER ROTH P.9

ヴァイオリン／神尾真由子 Violin MAYUKO KAMIO P.11

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ベルリオーズ 歌劇〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉序曲 [約10分] P.22
BERLIOZ / "Benvenuto Cellini" Overture

サン＝サーンス ヴァイオリン協奏曲 第3番 短調 作品61 [約28分] P.23
SAINT-SAËNS / Violin Concerto No. 3 in B minor, op. 61

- I. Allegro non troppo
- II. Andantino quasi allegretto
- III. Molto moderato e maestoso

[休憩 Intermission]

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14 [約49分] P.24
BERLIOZ / Symphonie fantastique, op. 14

- I. 夢と情熱
- II. 舞踏会
- III. 野の情景
- IV. 断頭台への行進
- V. ワルブルギスの夜の夢

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[特別協賛] 非破壊検査株式会社 (6/25)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業) (6/24)

[事業提携] 東京芸術劇場 (6/24)

[協力] ザ・シンフォニーホール (6/25)

ユーリ・ テミルカーノフ

Yuri Temirkanov

ベテランとして君臨
圧倒的な人気を誇る
ロシアを代表する巨匠

1938年旧ソ連コーカサス地方のナルチク生まれ。9歳から音楽を学び始め、13歳でレニングラード(現サンクトペテルブルク)音楽院に入学。卒業後の66年に全ソ連指揮者コンクールで優勝したことをきっかけにレニングラード・フィル

でムラヴィンスキーのアシスタントとなり、指揮者として歩み始めた。その後、レニングラード響の首席指揮者(68～76年)、キエロフ劇場(現マリインスキー劇場)の音楽監督(76～88年)などを歴任。88年からはサンクトペテルブルク・フィル(旧レニングラード・フィル)の音楽監督の地位にあり、ロシア音楽界の頂点に君臨し続けている。

ロシア以外では、ロイヤル・フィル(首席指揮者、92～98年)、ドレスデン・フィル(首席客演指揮者、92～97年)、デンマーク国立放送響(首席客演指揮者、98～2008年)、ボルティモア響(音楽監督、00～06年)などで要職を務めたほ



©読響

か、客演指揮者としてウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロンドン響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、シカゴ響などと共演を重ねている。

読響には2000年に初登場。楽団員と聴衆双方から圧倒的な支持を集め、その後04年、07年、10年、13年と共演を続け、ロシア音楽を中心としたレパートリーで名演奏を成し遂げてきた。2015年春の叙勲で、日本・ロシア間の音楽を通じた交流及び相互理解の促進に寄与したとして、旭日中綬章を受章した。今回が6回目の共演となる。

- ◇6月5日 定期演奏会
- ◇6月11日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇6月13日 東京芸術劇場マチネシリーズ

石川星太郎

Seitaro Ishikawa

ダイナミックな指揮で
豊穡な音楽を引き出す
期待の新星



2014年7月に日本テレビ「読響シンフォニックライブ」公開収録で読響を指揮してデビューした期待の新鋭。ブラームスの交響曲第3番とフォーレの〈レクイエム〉(独唱: 森麻季、堀内康雄/合唱: 新国立劇場合唱団)とい

う大曲を見事に指揮し、非凡な才能を実証した。今回が2度目の共演となる。

1985年東京生まれ。ドイツ・フライブルク国際ピアノアカデミーに2年にわたり参加。東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業し、アカンサス音楽賞受賞。故ゲルハルト・ボッセのアシスタントを務め、2013年以降はその後任として神戸市室内合奏団の定期演奏会をたびたび指揮。また06年以降毎年、作曲家の細川俊夫が音楽監督を務める武生国際音楽祭に出演し、指揮者、ピアニストとして同音楽祭の中核的役割を担っている。14年10月にはスイス・ボズヴィルの現代音楽アンサンブルに招かれ、スイス

国内ツアーに参加した。15年1月31日にはソウル・アート・センター(芸術の殿堂)で行われた《日韓国交正常化50周年記念コンサート》で、日韓のプロ奏者による合同編成オーケストラを指揮した。15年の国際リヒャルト・ワーグナー協会奨学生に内定している。

これまでにピアノを林達也、ユーラ・マルグリスに、そして指揮を田中良和、ハンス=マルティン・シュナイト、ゲルハルト・ボッセ、リユーディガー・ボーンに師事。現在はドイツ・デュッセルドルフのロベルト・シューマン^{けんさん}大学指揮科でさらなる研鑽を積み、学部生でありながら指揮科の助手も務めている。

◇6月19日 読響カレッジ

フランソワ＝グザヴィエ・ロト

François-Xavier Roth

古楽から現代音楽まで
意欲的な発信続ける
世紀の鬼才、読響初登場



©Marco Borggreve

1971年フランス、パリ生まれ。2003年には、17世紀から現代までの作品を、それぞれが書かれた時代の楽器で演奏する革新的なオーケストラ「レ・シエクル」を自ら創設。現在に至るまでフランス国内はもとよりイタリア、ドイツ、イギリス、日本でも数多く演奏し続けている。13年には同楽団とストラヴィンスキーのバレエ音楽〈春の祭典〉を、同作品の初演100周年を記念して録音し、そのCDは日本でも「レコード・アカデミー賞」管弦楽部門大賞を受賞するなど、世界的に注目された。

11年には読響常任指揮者シルヴェン・カンブルランの後任としてバーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者に就任。現代作品の演奏はもとより、R.シュトラウスの管弦楽作品の演奏とレコーディングなど、意欲的な取り組みが話題を集めている。オペラの分野ではパリのオペラ・コミック

座でのトマ〈ミニョン〉、オッフエンバック〈山賊たち〉、ドリーブ〈ラクメ〉、ベルリン国立歌劇場でのモートン・フェルドマン〈Neither〉、レ・シエクルとのワーグナー〈さまよえるオランダ人〉が特に高く評価された。本年9月にはケルン市の音楽総監督(ケルン歌劇場の音楽総監督)兼ケルン・ギュルツェニヒ管の首席指揮者に就任することが発表されており、11月にはベルリン・フィルにデビューするなど、今後ますますの活躍が期待されている。

読響とは今回が初共演。

◇6月24日 読響モロリタン・シリーズ
◇6月25日 大阪定期演奏会



メゾ・ソプラノ 小山由美

Mezzo-Soprano Yumi Koyama

東京藝術大学卒業、及び同大学院修了後、ドイツを拠点に活動を展開している。シノーポリ指揮〈ワルキューレ〉でローマ歌劇場、バイロイト音楽祭にデビュー。その後バイロイト音楽祭へ5年連続で出演し、国際的な評価を確立した。ワーグナーの主要な役をこなすほか、〈アイーダ〉〈カルメン〉〈ルル〉など幅広いレパートリーで活躍。コンサートの分野でもこれまでにシャルル・デュトワ、チョン・ミンフンらと共演し、マーラーの交響曲の歌唱でも高い評価を得ている。2009年、第40回サントリー音楽賞受賞。ドイツ・シュトゥットガルト在住。二期会会員。

◇6月5日 定期演奏会

女声合唱 新国立劇場合唱団

Women's Chorus New National Theatre Chorus

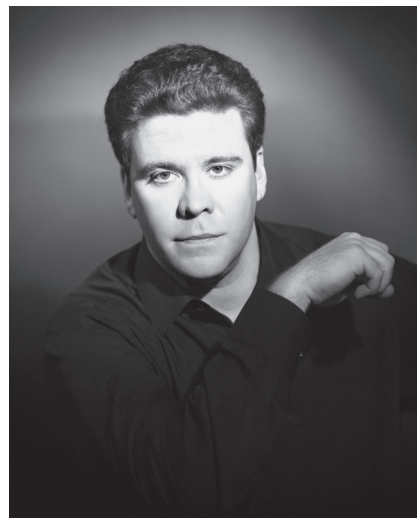
新国立劇場でオペラ公演の核を担う合唱団として、1997年の開場と同時に活動を開始。高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外のメディアからも高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ、モーツァルト〈レクイエム〉、ベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、ヴェルディ〈レクイエム〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博している。今回は女性メンバーが出演する。(合唱指揮・富平恭平)

児童合唱 NHK東京児童合唱団

Children's Chorus NHK Tokyo Children Chorus

「少年少女に豊かな心を」との願いと、NHKの教育・子供番組の充実を目的として1952年に創立。NHKへの出演はもとより、海外の合唱団との交流や国内のオーケストラとの共演、オペラへの出演、毎年定期演奏会開催、邦人作曲家への合唱作品の委嘱など、幅広く活動している。現在はジュニアクラス(小学2~4年)、シニアクラス(小学5年~中学2年)、ユースシンガーズ・ユースメンズクワイア(高校・大学生を中心)、によって構成され、団員は約190名。それぞれの年齢にふさわしい表現とレパートリーで演奏に取り組んでいる。

◇6月5日 定期演奏会



©Evgeny Evtyukhov

ピアノ デニス・マツエフ

Piano Denis Matsuev

1998年、チャイコフスキー国際コンクール優勝。世界各地の著名なホールでリサイタルを数多く行うかたわら、テミルカーノフ、メータ、ゲルギエフら名だたる指揮者と共演。ベルリン・フィル、ロンドン響、BBC響、ニューヨーク・フィルなどの一流楽団に招かれ、その正確無比な演奏技術と力強い表現力で絶賛を博している。2014年ソチオリンピックの閉会式ではゲルギエフ、バシメットら巨匠たちとともに演奏を披露。RCA Red Seal、LSOレーベルなどからCDをリリース、いずれも好評を得ている。読響とは今回が初共演。

◇6月11日 サントリーホール名曲シリーズ
◇6月13日 東京芸術劇場マチネシリーズ



©Hirofumi Isaka

ヴァイオリン 神尾真由子

Violin Mayuko Kamio

2007年、チャイコフスキー国際コンクール優勝。ニューヨーク・タイムズ紙で「輝くばかりの才能」と絶賛される。ゲルト・アルブレヒト(読響第7代常任指揮者、後に桂冠指揮者)、デュトワ、アシュケナージ、ビエロフラーヴェクらと共演。メータ指揮ミュンヘン・フィルとの南米ツアーや、モルロー指揮イスラエル・フィルとのイスラエル・ツアーなどにも参加した。使用楽器はストラディヴァリ・ソサエティより貸与された1735年製ガエルネリ・デル・ジェス“Sennhauser”。読響とは13歳で初めて共演して以来、関係を深めている。

◇6月24日 読響外ロボリタン・シリーズ
◇6月25日 大阪定期演奏会

6.5 [金]

船木篤也 (ふなき あつや)・音楽評論

マーラー
交響曲 第3番 ニ短調

作曲：1892～96年／初演：1902年6月9日、クレーフェルト（ドイツ）／演奏時間：約100分

破天荒な六つの楽章が描く生命の理念

近代の交響曲の基本形は、古典派のヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）の創作によって定着をみたとされる。すなわち、四つの楽章からなり、それぞれ第1楽章＝速い、第2楽章＝遅い、第3楽章＝舞曲系（メヌエット、スケルツォなど）、第4楽章＝速いという構成をとる。ロマン派のアントン・ブルックナー（1824～96）あたりでも、この線を守っているだろう。

そこへゆくと、グスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第3番は破天荒というほかない。全部で六つも楽章がある。第1楽章は35分と長大で、これだけで「第1部」をなす。残りの楽章ぜんぶが「第2部」。最終楽章はゆっくりゆったりと、25分も続く。楽器編成も大規模で、多彩だ。

なぜこのようなものが現れたのか？これには、理念の表明という観点からみるのがよい。音楽にあっても、「いかに書くか」という以上に「何を伝えるか」を重視する行き方が出てきたのだ。「詩的理念」をもとに作曲したフランツ・リスト（1811～86）などから発展したライン。哲学に親しんだマーラー個人の資質というものもあるだろう。

本作の理念は、ずばり「自然」である。ただし、1896年の、マーラーの次の発言に注意されたい。「いつも奇妙に思うのですが、人は“自然”というと、たいがい花や鳥や森の空気のことしか考えません。ディオニュソス神のことを、あの牧神のことを、誰も知らないのです」。古代ギリシアのディオニュソス神を、マーラーは明らかに——哲学者

ニーチェにならって——全自然・全生命の根源ととらえているのである。そして第3交響曲の第1楽章を、作曲の最終段階で「牧神は目覚める／夏が行進してくる（バッカスの行進）」と呼んだ。この後に続く各楽章に与えられた標題も挙げておけば、「野の花が私に語ること」、「森の生き物たちが私に語ること」、「人間が私に語ること」、「天使たちが私に語ること」、「愛が私に語ること」となる。第6楽章にいう「愛」とは、マーラーによれば、何びとをも見捨てない神の慈愛のことだという。

こうしてみると、この交響曲が、原生命から始まって進化論的に人間にまでたどりつき、ついには至高の神をうたうものであることが分かってくる。

ところがマーラーはこれら標題を、出版の段になって取り下げってしまった。理念たる自然＝宇宙を「描写」した音楽と取られたくなかったのか。彼の音楽は、いわば理念そのものだったのだ。

第1楽章 力強く、決然と 8本のホルンが冒頭で吹く旋律は、当時の自由主義的な若者たちの間でよく知られた学生歌にもとづく。行進曲調も目立ち、そうした社会的「闘争」の身ぶりが、「自然の目覚め」や「夏の嵐」の音楽と交差するのが特徴。

第2楽章 メヌエットのテンポで、つとめて中庸に、そう、急がずに！ 典雅な踊りメヌエットの部と、急速で諧謔的なスケルツォの部が交代する。

第3楽章 寛いで、スケルツァンド、慌てずに「カッコーが死んだらナイチンゲールの番さ」という内容の自作の歌曲《夏季交代》を転用。ほかの素材も加わり、鳥の声がしきりと聞こえる。遠方からは郷愁をさそうポストホルン（郵便馬車のラッパ）も。

第4楽章 非常に遅く、神秘的に、一貫してピアノシモで ニーチェ著『ツァラトゥストラはかく語りき』からとられた詩を、アルト独唱が歌う。「だがあらゆる喜びは永遠を求めろ」の旋律は、第1楽章にあったもの。

第5楽章 テンポは愉しげに、表情は悪戯っぽく 民謡集『少年の不思議な角笛』からとられた詩をアルト独唱と児童&女声合唱が歌う。内容は終楽章のテーマ「神の慈愛」につながる。

第6楽章 遅く、静かさを湛えて、感じて 前楽章から間を置かず、慈愛に満ちた弦楽合奏で始まる。二つの主たる音楽素材が変奏されて進行。第1楽章の不穏な回想も。総譜の最後1頁には、「力任せにはではなく、たっぴりとした高貴な音で」との指示がある。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット2（クラリネット持替）、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8、ポストホルン、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（グロッケン、タンブリン、トライアングル、小太鼓、鐘、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タムタム、ルーテ）、ハープ2、弦五部、独唱メゾ・ソプラノ、女声合唱、児童合唱



4. Zarathustras Mitternachtslied

Friedrich Nietzsche, from „Also sprach Zarathustra“

O Mensch!
Gib acht!
Was spricht, die tiefe Mitternacht?
„Ich schlief, ich schlief -,
Aus tiefem Traum bin ich erwacht: -
Die Welt ist tief,
Und tiefer als der Tag gedacht.“

O Mensch!
„Tief,
tief ist ihr Weh -,
Lust - tiefer noch als Herzeleid:
Weh spricht: Vergeh!
Doch alle Lust will Ewigkeit -,
- will tiefe, tiefe Ewigkeit!“

5. Armer Kinder Bettlerlied

Achim von Arnim & Clemens Brentano, from „Des Knaben Wunderhorn“

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

Es sangen drei Engel einen süßen
Gesang,
Mit Freuden es selig in dem Him-
mel klang.
Sie jauchzten fröhlich auch dabei,
Daß Petrus sei von Sünden frei.

Und als der Herr Jesus zu Tische saß,
Mit seinen zwölf Jüngern das Abend-
mahl aß,

第4楽章 ツアラトゥストラの輪唱歌

フリードリヒ・ニーチェ『ツアラトゥストラ
はかく語りき』より

おお人間よ！
よく聞け！
深い真夜中は何を語っているか？
「私は昏々と眠っていた、
深い夢から私はいま目覚めた。
この世は深い、
昼が考えた以上に深い！」

おお人間よ！
「深い、深いのだ！
この世の痛みは深い。
快びは——快びは心の奥底の苦しみよりも深い。
痛みは言う、消え去れ！ と。
だがあらゆる快びは永遠を求める、
深い、深い永遠を求める！」

第5楽章 哀れな子らのもの乞う唄

アヒム・フォン・アルニム & クレメンズ・ブ
レンターノ『少年の不思議な角笛』より

合唱
びむ ばむ びむ ばむ…

あるとき三人の天使が 愛らしい歌をうたって
おりました
いかにも嬉しそうに それは天上で浄らかな響
きをふりまいていました
天使たちは愉しげに 歓びの声をあげて言いました
「ペテロの罪は晴れたよ！」

そう イエスさまが食卓にお着きになり
十二人の弟子たちと最後の晩餐をおとりになっ
ていたときのこと

Da sprach der Herr Jesus: „Was stehst
du denn hier?
Wenn ich dich anseh', so weinst du mir.“

Alt:
„Und sollt' ich nicht weinen, du gü-
tiger Gott“

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

Alt:
„Ich hab übertreten die zehen Gebot;
Ich gehe und weine ja bitterlich“

Chor:
Du sollst ja nicht weinen!

Alt:
„Ach komm und erbarme dich über
mich.“

Chor:
Bimm bamm, bimm, bamm, ...

„Hast du denn übertreten die zehen Gebot,
So fall auf die Knie und bete zu Gott!
Liebe nur Gott in alle Zeit,

So wirst du erlangen die himmlische
Freud.“

Die himmlische Freud, die Selige Stadt;
Die himmlische Freud, die kein Ende
mehr hat.
Die himmlische Freude war Petro bereit
Durch Jesum und allen zur Seligkeit.

Bimm bamm, bimm, bamm, ...

イエスさまはこう言われました「そこでいった
い何をしておる？
私と目があうと そんなに泣いたりして！」

アルト独唱
「泣くでないと仰るのですか こころ優しい神
さま」

合唱
汝、泣くべからず 汝、泣くべからず

アルト独唱
「おいらはあの十戒を 破ったのでござります
『ペテロは行ってひどく泣く』のでござります」

合唱
汝、泣くべからず 汝、泣くべからず

アルト独唱
「どうかお願いします おいらを憐れんでくださ
いまし！」

合唱
びむ ばむ びむ ばむ…

「十戒を破ったのなら
ひざまずいてな 神さまに向かって祈れ
いつでも ひたすらに神さまをお慕い申し上げ
ることだ
そうすればおまえも 天上の喜びを手にするこ
とだろう」

天上の喜び それは浄福の都
天上の喜び それは尽きることを知らない
天上の喜び それはペテロにも与えられていた！
清らかな幸あれと イエスさまはそれを 皆に
お与えになったのです

びむ ばむ びむ ばむ…

(訳：船木篤也)

6.11 [木]

6.13 [土]

相場ひろ (あいば ひろ)・音楽ライター

プロコフィエフ ピアノ協奏曲 第3番 ハ長調 作品26

作曲：1913～21年／初演：1921年12月16日、シカゴ／演奏時間：約27分

民謡的素材と管弦楽との良好なバランス

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）が書いた5曲のピアノ協奏曲中、最も人気の高いのが第3番である。この曲は彼がまだ音楽院に在籍していた1913年（ピアノ協奏曲第2番が初演された年）に第2楽章の変奏曲が書き始められたものの、その後長く放置されていた。しかし18年、ソヴィエト革命の混乱を避けて日本経由で西側世界に亡命したプロコフィエフは、自らがピアニストとして活動するためのレパートリーを拡充する必要に迫られて協奏曲の作曲を再開し、21年、滞在先のフランス・ブルターニュで全曲を完成させた。当時ブルターニュで彼の隣人であったロシアからの亡命詩人、コンスタンチン・バリモントは、作曲中のこの曲を聴いてプロコフィエフに1編の詩を捧げ、その中で「無敵のスキタイ人が太陽という太鼓を叩く」と曲の印象を記している。

初演は作品の完成と同じ年、21年の年末にシカゴで、作曲者自身のピアノ、フレデリック・ストック指揮シカゴ交響楽団の演奏によって行われた。この時の聴衆の反応は冷たく、ニューヨークにおける再演も失敗に終わった。だが、翌年にセルゲイ・クーセヴィツキーと共演したパリでの演奏会が成功を収め、以後ヨーロッパ各地で演奏を重ねたことで、徐々に評価が高まっていった。5曲の協奏曲中唯一第3番だけ、プロコフィエフ自身の独奏による録音が遺されたことから、その人気のほどがうかがい知れる。

前作のピアノ協奏曲第2番がモダニズムを徹底的に追究して、ピアニストに高度な技巧を要求すると同時に、聴衆にとっても近寄りがたい音楽になったのと対照的に、第3番はやはりモダンな響きを醸しながらも民謡的素材の使用や管弦楽との良好なバランスによ

って、格段に平易な印象を与える作品となった。曲は三つの楽章からなる。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ クラリネットの歌うロシア民謡風の優しい旋律と共に幕を開ける。続いてあらわれる弦楽器の細かい動きにのって、ピアノ独奏が第1主題を歌い出す。独奏が輝かしい技巧を披露した後に登場する第2主題は、とげのあるユーモアを感じさせて个性的である。

その後、中間部では冒頭の旋律がピアノによって展開されていくものの、ほどなくして再現部に移行する。ここでは第1主題登場までの無窮動的な音形が大きく拡張されているのをはじめ、提示部を大胆にふくらませているのが目につく。

コーダでは再現部冒頭の無窮動的な音形が引用され、唐突なエンディングを印象づける。

第2楽章 アンダンティーノ 主題と五つの変奏からなる。

軽やかでいくぶんユーモラスな主題がフルートとクラリネットで奏された後、第1変奏ではピアノがジョージ・ガーシュイン（1898～1937）を思わせるジャズ風の華麗な和声付けをするのが興味深い。

第2変奏はトランペットと弦楽器の間で主題がやりとりされる中を、ピアノ

が華麗に駆け抜ける。第3変奏はピアノにあらわれる重い足どりのシンコペーションと、両手のみせる平行の動きが特徴的だ。第4変奏は繊細な響きが神秘的な色合いを帯び、第5変奏は行進曲調の曲想と共に力強いクライマックスを描き出す。最後は繊細な響きが大気に溶け入るようにして終わる。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo おおよそ3部形式をとる。冒頭にあらわれる主題は、日本滞在の折に耳にした〈越後獅子〉に基づくと言われることがあるが、俗説に過ぎず、民謡的な旋法を採用しているがゆえに近いものに聞こえるという程度のものだろう。実際にはこの主題は、彼が未完のまま遺した弦楽四重奏曲の素材を流用したものである。

リズムミクナ動きの目立つ第1部に對して、中間部は一転して叙情味の勝った曲想をとる。管弦楽による田園的ともいえる部分と、ピアノが導き出すアイロニカルな旋律に基づく部分からなり、前者が大きくふくらまされて後、第1部の回帰に至る。3拍子のビートに2拍子の音楽をのせてユニークな躍動感を醸す音楽が、力強く全曲を締めくくる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、カスタネット、タンブリン）、弦五部、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ 交響曲 第10番 ホ短調 作品93

作曲：1943～53年10月25日／初演：1953年12月17日、レニングラード（現サンクトペテルブルク）／演奏時間：約50分

人間的な感情と情熱の表現

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、1945年に発表した交響曲第9番がソヴィエト連邦当局などから厳しく批判された後、8年の歳月において交響曲第10番を発表した。この作品は、ソ連邦の最高指導者であったスターリンの死去、後継者マレンコフによる自由主義への接近といった政治的な大事の続くさなかでの初演となったために、国内外から大いに注目され、激しい賛否両論を引き起こした。特にソ連邦内では、ペシミスティックともいえる暗さに大きく支配された曲想が、社会主義リアリズムの要求する楽観主義的な世界観と相容れないと批判された。その一方で、国内の同僚アラム・ハチャトゥリアンからは熱い擁護を受け、また国外では各国で初演権をめぐって激しい争奪戦も繰り広げられるなど、楽曲を高く評価する声が増加。ことに西側諸国では交響曲第5番に次ぐ人気曲として、早くからカラヤンをはじめ多くの指揮者がレパートリーに採り入れていった。

この作品は、上述の通り発表時の経緯から政治的文脈で語られることが多

く、例えばソロモン・ヴォルコフ著『ショスタコーヴィチの証言』はこの作品をスターリン時代に対する批判として書かれたとし、激しい第2楽章を「暴君スターリンの肖像」であると解釈していた。ショスタコーヴィチが自らの名前のイニシャルを音化し、しばしば一種の自画像として用いたD（レ）-Es（ミ♭：Sと読める）-C（ド）-H（シ）という音形が随所に現れ、終楽章では、すべてを押し流す圧倒的な音の流れに抗うかのように振る舞うことも、そうした解釈を裏付けるものとしてよく言及される。

しかし、近年ショスタコーヴィチの草稿研究が進み、かつ彼が当時密かに思いを寄せていた教え子エリミーラ・ナジロヴァへの書簡が公開されたことで、以前の作品像を覆す事実が次々に明らかにされた。まず第一に、この曲は従来53年夏から秋にかけて一気に書き上げられたとされていたが、実際には最初の構想やスケッチは43年にまでさかのぼるため、初演当時の時局を反映する楽曲という解釈は成立し難くなった。また第3楽章で繰り返

ホルンによって歌われるE（ミ）-A（ラ）-E（ミ）-D（レ）-A（ラ）という音形はエリミーラ Elmira の名前に由来しており、彼が強く想いを寄せた彼女への個人的な告白として同楽章が書かれていたことが、書簡の調査から判明した。初演当時のショスタコーヴィチは、この曲について「人間的な感情と情熱を描きたかった」と発言していたが、社会状況から見て政治的なはぐらかしととられたその言葉が作品の真実を語っていたことが、時を経てようやく裏付けられたのであった。

第1楽章 モデラート 低弦の蠢くような弱奏によって開始される。この最初の低音の動きには、作曲者の自画像D-Es-C-Hの音形を順番を変えて移調した動機が含まれている。やがてその音形から派生した第1主題がクラリネット独奏にあらわれ、音楽は次第に高揚していく。いったん沈静した中から、印象的な半音階進行を含む第2主題がフルート独奏によって奏でられる。展開部は諸主題の要素がさまざまなかたちに変容され、叙事詩的な広がりを見せる。最高潮のうちに再現部に移行した後、音楽は徐々に力を失い、不安を抱えつつ静かに幕を閉じる。

第2楽章 アレグロ 一種のスケルツォ楽章。叩きつけるように刻まれる

弦楽器のリズムの上で、第1楽章の序奏から派生した主題を木管楽器がけたたましく歌い上げて開始。弦楽器がせわしない音形を奏し続ける中、管楽器群が聴き手を威圧するかのよう、荒々しく音の流れに介入していく。

第3楽章 アレグレット ワルツ風の音楽がとつとつと奏される。冒頭の主題はやはり第1楽章の序奏に由来し、続いて木管楽器に登場する副主題には作曲家自身を表すD-Es-C-Hの音形が織り込まれている。ノスタルジックでありながらどこかアイロニカルな雰囲気の中、前述のホルンの音形が異界からの呼び声のように何回も響きわたる。

第4楽章 アンダンテ～アレグロ 冒頭、弦楽器に悲しげな旋律があらわれ、木管楽器の独奏が次々にそれを歌い継いでいく。それらの旋律の中からやがてリズムカルな音形が生まれ、それを主楽想として主部のアレグロが開始される。民族舞踊風の音形や行進曲のリズム、カノン風の動きなど、さまざまな要素が入り乱れる狂騒に近い雰囲気は、金管楽器の強奏によるD-Es-C-Hの音形で断ち切れ、同音形にもとづくめいそう的場面が続く。やがてアレグロが回帰し、D-Es-C-Hの音形を圧倒して結末を迎える。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、タムタム、トライアングル、タンブリン、シロフォン、シンバル、大太鼓）、弦五部



ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年／初演：1893年12月15日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

民俗音楽を国際的に普遍化したチェコの巨匠

アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)は、チェコの国民楽派を代表する作曲家です。プラハ近郊の村の宿屋兼肉屋に生まれた彼は、オルガン学校(プラハ音楽院の前身)で学び、卒業後はオーケストラのヴィオラ奏者になりました。そこではスメタナの指揮でも演奏。この先達の民俗主義音楽から強い影響を受けます。飛躍のきっかけは、1875年にオーストリア国家奨学金を獲得し、審査員だったブラームスの後押しを得たこと。ドヴォルザークは、〈スラヴ舞曲集〉で名を上げた後、イギリスに再三招かれるなど国際的な名声を確立しました。1892年には音楽院の院長としてアメリカへ渡り、現地の音楽から刺激を受けながら、滞在2年半の間に、交響曲〈新世界から〉、チェロ協奏曲、弦楽四重奏曲〈アメリカ〉といった代表作を作曲。帰国後は、プラハ音楽院の教授及び院

長として後進の指導にも尽力し、1901年初演の〈ルサルカ〉によってオペラでも成功を収めました。

30代半ばに子供を3人続けて亡くす不幸はありましたが、普通に結婚して6人の子供を育て、鉄道や鳩の趣味でも知られたドヴォルザーク。彼の生涯は、大作曲家としては平穏だったといえるでしょう。

ワーグナーやブラームスの影響下でスタートした彼は、やがて地元ボヘミアをはじめとするスラヴの民俗色を西欧の様式に同化させた独自の作風を確立。9曲の交響曲や多数の室内楽曲など、西欧的な絶対音楽で真価を発揮し、自国の民俗主義音楽に国際的な普遍性をもたらしました。その作品は、魅力的な旋律を満載。日本音楽に通じる五音音階の効果的な使用と相まって、我々の琴線を刺激してやみません。

異国の刺激と郷愁がこもるアメリカ便り

〈新世界から〉は、ドヴォルザークが前作第8番から4年ぶりに書いた最後の交響曲。古今の交響曲の中でもトップクラスの人気作です。

1892年9月、すでに国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて渡米し、95年4月まで音楽院の院長を務めました。そして滞在中に、当地で知った黒人霊歌やアメリカの伝統音楽の要素と故郷ボヘミア色を融合させた、前記のような名作を残しました。その第

1作が、渡米翌年の1893年1～5月に作曲された〈新世界から〉。同年カーネギー・ホールにて初演され、大成功を収めました。

本作におけるアメリカの影響は、先住民の英雄を扱った詩「ハイアワサの歌」から靈感を得たとされる第2、3楽章などに表れていますが、作曲家自身「先住民の音楽や民謡の精神を汲んで作曲しただけ」と述べているように、あくまでイメージ的なもの。現地音楽への

共感、アメリカや大都会ニューヨークの印象、故郷への郷愁などが融合した音楽であり、「新世界から」発信された“アメリカ便り”ともいえるべき作品です。

曲は、4つの楽章から成る名旋律の宝庫です。

第1楽章 アダージョ〜アレグロ・モ

ルト 序奏部のホルンによる動機は、全楽章に登場します。主部は、その動機に基づく第1主題、フルートとオーボエが奏する第2主題を軸に進行。

第2楽章 ラルゴ 郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏する主題

は、後に歌詞が付けられ、〈家路〉の名で普及しました。中間部の切なさ^たを湛えた美感も胸を打ちます。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ 舞曲風の歯切れ良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれます。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1主題が中心を成し、クラリネットが歌う第2主題のほか、前3楽章の主題も顔を出します。



6.24 [水]

6.25 [木]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ベルリオーズ 歌劇〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉序曲

作曲：1834～38年／初演：1838年9月10日、パリ・オペラ座／演奏時間：約10分

熱狂的興奮をかきたてる主題の交差

1832年にローマ留学からパリにもどったエクトール・ベルリオーズ（1803～69）にとって、最大の関心事はパリ・オペラ座での成功であった。34年、ベルリオーズはイタリア・ルネサンス期の彫金師ベンヴェヌート・チェッリーニの自叙伝に出会う。チェッリーニの英雄的な芸術家像に引きつけられたベルリオーズは、レオン・ド・ヴァイイとオギュスト・バルビエらに台本を依頼し、イタリア体験の記憶も新しいなかで、これをオペラに仕立てた。

1838年、オペラ〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉はパリ・オペラ座で初演されるが、序曲を除いて不評に終わり、わずか数回のみで上演は打ち切られてしまう。ベルリオーズはこの不成功を「拷問台にかけられた」ようなものと述べ、以後、オペラ座は事実上ベ

ルリオーズに門戸を閉ざしてしまった。

舞台は謝肉祭を迎えたローマ。彫金師チェッリーニと教皇財務官の娘テレザは互いにひかれあっている。しかし、テレザは心ならずも教皇の彫金師フィエラモスカと結婚しなければならぬ。チェッリーニはテレザの誘拐を企てるが計略は失敗し、騒動のなかでフィエラモスカの友人を剣で刺してしまう。チェッリーニはペルセウス像の鑄造をなしとげることで教皇の赦しを得て、恋人テレザと結ばれる。

序曲は「決然と、嵐のような激しさを持って」と指示された主題で勢いよく開始され、チェッリーニの果敢さを示唆する。穏やかなラルゲットを経て、ふたたび活発な冒頭主題があらわれる。オペラ本編の主題をさまざまに交差させながら、熱狂的な興奮をかきたてる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット4、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ3、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

サン＝サーンス ヴァイオリン協奏曲 第3番 短調 作品61

作曲：1880年／初演：1881年1月2日、パリ／演奏時間：約28分

サラサーテとの交友が生んだ円熟期の傑作

3歳の誕生日を迎えてまもなく最初のピアノ曲を作曲したという、モーツァルト級の神童であったカミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）は、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的な名声を築きあげ、86歳で生涯を閉じる最晩年まで作曲活動続けた。その創作期間はきわめて長い。

ヴァイオリン協奏曲第3番が作曲されたのは1880年、45歳の年。すでに交響詩〈死の舞踏〉やオペラ〈サムソンとデリラ〉、ピアノ協奏曲第4番を書きあげて円熟期を迎えた頃にあたる。作品はスペインの名ヴァイオリニストで、〈ツィゴイネルワイゼン〉の作曲者としても知られるパブロ・サラサーテとの交友から生まれた。

「サラサーテはこれ以上はないというくらい何気ない調子で、協奏曲を書いてほしいと頼んできた。ずいぶんとおだてられて気分がよくなり、作曲を約束してしまった」というサン＝サーンスは、ヴァイオリン協奏曲第1番をはじめ、〈序奏とロンド・カプリチオ

ーソ〉、そしてこのヴァイオリン協奏曲第3番をサラサーテのために作曲している。作曲にあたって、サラサーテは惜しむことなく有益な助言を与えてくれたという。

第1楽章はアレグロ・ノン・トロppo。弦楽器のトレモロで開始され、すぐに独奏ヴァイオリンが登場し、情熱的な第1主題を奏でる。甘美で夢見るような第2主題との間で曲想を交替させながら、華麗なコーダへと向かう。

第2楽章はアンダンティーノ・クアジ・アレグレット。8分の6拍子の舟歌のリズムに乗って、独奏ヴァイオリンが叙情的な調べを綿々と紡ぎ出す。楽章の終盤では、独奏ヴァイオリンがハーモニクス（＝フラジオレット。独特の音色を生む倍音奏法）を用いて、クラリネットを従えながら、神秘的な効果を生み出す。

第3楽章はモルト・モデラート・エ・マエストーソ。重々しい序奏に活発な主部が続く。メランコリーを漂わせながら、壮麗なフィナーレを築く。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14

作曲：1830年／初演：1830年12月、パリ音楽院／演奏時間：約49分

満たされない愛の昇華された形

ベートーヴェンが世を去ってわずか3年後、ベルリオーズは半自伝的交響曲とでもいうべき、異色の大交響曲を書きあげた。当時としては大規模な管弦楽と色彩的なオーケストレーション、そして個人的な恋愛体験に由来する奇想天外な標題性は、それまでの交響曲には見られない独創性にあふれている。当時、ベルリオーズは26歳。それぞれの楽章には文学的な標題が添えられ、恋に破れて絶望した芸術家がアヘンで服毒自殺をはかるものの死にきれず、奇怪な幻覚を見るという筋立てを持つ。

1827年9月、ベルリオーズはパリのオデオン座でイギリスの劇団が上演する〈ハムレット〉を観る。オフィーリア役を演じた女優はハリエット・スミッソン。ベルリオーズはほとんど英語を解さなかったにもかかわらず、シェイクスピア作品の偉大さと崇高さに衝撃を受け、同時にスミッソンに対して熱烈な思いを燃えあがらせた。

ベルリオーズはスミッソンに理想化された女性像を見出し、その後2年間にわたって休むことなく彼女を追い続

けた。しかし手紙や面会の申し込みも報われず、人気女優が駆けだしの音楽家に興味を持つことはなかった。満たされない愛はやがて苦しみへと形を変え、ベルリオーズは狂おしい思いを〈幻想交響曲〉に昇華させた。

この頃、ベルリオーズはフランソワ・アントワヌ・アブネック指揮パリ音楽院演奏協会によるベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉と第5番〈運命〉の演奏に接して深い感銘を受け、交響曲の可能性に目を向けることになった。「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、私の目の前に新しい音楽の世界を開いてくれた」。電撃的なシェイクスピア体験とベートーヴェン体験が、〈幻想交響曲〉の作曲を準備したといえるだろう。

1830年、〈幻想交響曲〉はパリ音楽院で初演された。初演には作曲家リストも立ち会い、後にこの曲をピアノ用に編曲している。ベルリオーズとスミッソンとの関係は、ここから意外な展開をたどる。32年、ベルリオーズが〈幻想交響曲〉を含む自作の演奏会を

開いた際、当時パリを訪れていたスミッソンが仲介者の労によりこの演奏会に足を運ぶ。ついにベルリオーズはスミッソンとの出会いを果たす。5年前とはすっかり状況は変わり、ベルリオーズが名声を高めていたのに対し、スミッソンの人気は凋落^{ちようらく}していた。まもなくベルリオーズはスミッソンにプロポーズし、33年、ついに二人は結婚するに至った。

二人の間には息子が生まれるが、結婚の幸福は長くは続かない。性格の衝突や貧しさのため、燃えるような恋もすっかり冷え切り、数年後に両者は別れを迎えた。

曲は5つの楽章から構成される。

第1楽章 “夢と情熱” ゆったりとしたラルゴの序奏で開始され、憧憬^{しょうけい}や不安を表現する。アレグロの主部に入ると、恋人の主題がフルートと第1ヴァイオリンにあらわれる。この恋人の主題は固定楽想として、全曲を通して形を変えながら、くりかえし登場する。

第2楽章 “舞踏会” 通常第3楽章に置かれるメヌエットやスケルツォに代わって、ワルツが第2楽章に配置される。ワルツの合間に恋人の主題が挿入され、賑やかな舞踏会のなかで恋人の姿を見つける様子が描かれる。最後は唐突なコーダが憧れるような恋人の主

題をかき消して、舞踏会の華やかさを強調する。

第3楽章 “野の情景” 夏の夕べに野をさまよって、芸術家は恋人への思いを募らせる。イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが羊飼いの笛を吹く。牧歌的な光景を目にしながらも心中にはびこる不安を抑えられない。ティンパニが不吉な遠雷を描写する。

第4楽章 “断頭台への行進” 芸術家は夢のなかで恋人を殺して、死刑を宣告される。芸術家をギロチンへと誘う、騒々しくも陰惨なマーチが奏でられる。はやし立てる見物人たちの姿が目に見え。最期の瞬間に恋人の主題が一瞬姿を見せる。しかし総奏による強烈な死の一撃が、すぐに甘美な思いを断ち切る。オチを付けるようにファンファーレが鳴り響くが、曲は終わらない。

第5楽章 “ワルブルギスの夜の夢” 芸術家の葬儀に魑魅魍魎^{ちみもうりょう}たちがやってくる。妖怪や魔女の禍々^{まがまが}しい宴^{うたげ}がくりひろげられる。恋人は醜い姿に成り果てた。吊いの鐘が鳴り、グレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉の旋律があらわれる。不気味なコル・レーニョ（弦楽器の弓の木部で弦を叩く奏法）が乾いた笑いを連想させる。狂乱のなかで宴はクライマックスへと突き進む。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓）、ハープ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部